

## 看護大学教員らによる新型コロナウイルス感染症関連業務への 支援の実態と課題—神戸市看護大学の調査結果から—

岩本里織<sup>1</sup>, 水川真理子<sup>1</sup>, 南裕子<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 神戸市看護大学, <sup>2</sup> 元神戸市看護大学

キーワード: 新型コロナウイルス感染症, 健康危機管理, 積極的疫学調査, 保健所, 業務支援

### Actual Conditions and Challenges of Support for Activities Related to Covid-19 Infections by Nursing Faculty Members. -Results of a Survey at Kobe City College of Nursing-

Saori IWAMOTO<sup>1</sup>, Mariko MIZUKAWA<sup>1</sup>, Hiroko MINAMI<sup>2</sup>

<sup>1</sup>Kobe City College of Nursing, <sup>2</sup>Former Kobe City College of Nursing

Key Words: Coronavirus infection, Health Crisis Management, Aactive Epidemiological Survey,  
Public Health Center, Operational support

#### 要 旨

【目的】本報告は、神戸市看護大学の看護教員等による行政の新型コロナウイルス感染症関連業務の支援の実態と課題等を明らかにすることを目的とする。

【方法】対象者は、神戸市看護大学において新型コロナウイルス感染症関連業務に協力した教員等42人であり、2022年3月～4月にWEBによる質問紙調査を行った。調査内容は、支援業務内容、支援動機、支援を通して得られたこと・良かったこと、支援に関する課題等である。本調査は、所属大学の倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】15名(35.7%)より回答があった。神戸市保健所に関しては、支援動機が、「保健所の活動や対応への興味」80.0%、「保健師の活動や対応への興味」「大学と関係が深い自治体業務だから」が各70.0%などであり、支援を通して得られたこと・良かったことは、「保健所の活動や対応の理解」、「感染者の自宅療養の実態や生活状況の理解」各100%などであった。神戸市軽症者宿泊所は、支援動機が、「看護職として貢献」87.5%、「看護職不足の解消へ貢献」「大学と関係が深い自治体業務だから」62.5%、得られたことが、「軽症者宿泊所の実態の理解」「看護職としての貢献」各87.5%などであった。またすべての支援業務について、支援した教員らが感じた困難の性質を分類したところ【大学と現場との調整の課題】【大学の調整上の課題】【現場の課題】【感染症の特徴による課題】の4つ課題に分類できた。

【考察】本結果から、看護教員等は、新型コロナウイルス感染症関連業務の支援に関して、看護職としての使命感を感じると共に、大学と関係が深い自治体の業務であることが協力の動機として大きいと分かった。支援の経験が教育や研究に活かされる重要な機会となっており、意義ある経験であることが考えられた。今後新たな感染症健康危機が発生した時に備え、自治体との協議の上で協定等の締結や支援体制の明確化、大学の役割などの検討が必要であることが示唆された。

#### I. 背景

中国の武漢市で発生した新型コロナウイルス感染症により、2020年1月30日にWHOが「国際的な緊急事態」を宣言し(公益社団法人日本WHO, 2020)、2020年2月には世界的な感染症パンデミックを引き起こした。2020年4月7日に日本政府は兵庫県を含む7都府県に緊急事態宣言を出し「人との接触は最低7割極力8割削減を」と外出の自粛を呼びかけた(NHK)。

新型コロナウイルス感染症感染拡大に伴い、各自治体においては、帰国者発熱者の相談に応じる帰国者発熱者相

談センターを設置した。さらに感染症病床数の不足により医療機関の受け入れが困難になったため、新型コロナウイルス感染症軽症者宿泊療養施設を設置した。

神戸市においても、当施設が開設され、神戸市看護大学(以下、本学)の看護資格を有した教職員が要請に応じて業務の支援を行った。さらに、新型コロナウイルス感染者が増え続けたため、神戸市からの依頼により、本学教員らが神戸市保健所保健センターの積極的疫学調査や自宅療養者健康観察業務への支援を行った。

自然災害においては、局地的被害である場合が一般的であり、厚生労働省を中核とした災害時健康危機管理

支援チーム（DHEAT: Disaster Health Emergency Assistance Team）や公衆衛生医師、保健師等の人材の応援派遣調整の体制が整備されている（五十嵐, 2022）。しかしながら、世界中でパンデミックを引き起こした新型コロナウイルス感染症に関しては、医療機関病床数の不足どころか、保健所対応の限界を超えた未曾有の事態であった。そのため自然災害を想定した自治体間の協力システムは機能せず、各地域における保健師や看護師などの看護職の人員の確保が求められた。そこで機能したのが、看護系大学における看護教員らであった。しかしながら、看護系大学の教職員による新型コロナウイルス感染症業務への支援に関する動機や支援の利点（得られたことや利点など）や支援上の課題などを明らかにした既存調査はない。

今回発生した新型コロナウイルス感染症パンデミックのような健康危機は、今後も繰り返し発生することが予測されている。その際に、各自治体において看護系大学の看護教員らの活用が不可欠になると考える。本学では全国に先駆けて設置母体である神戸市への支援をおこなった。本学の看護系教員らの自治体支援の動機や支援を通して得られたこと、支援上の課題やその解決策を明らかにすることは、今後の感染症等の健康危機管理発生時における看護系大学の看護人材がどのように機能しうるかを検討する資料になると考える。さらに、国や自治体の健康危機時における看護系大学との協力体制構築に関する検討の一助となると考える。

そこで、本報告では看護教員らが新型コロナウイルス感染症関連業務の行政支援を行った動機と行政支援を通して得られたこと・良かったこと、さらに行政支援を実施した際に感じた支援上の課題とその解決策を明らかにすることを目的とした。

## Ⅱ. 新型コロナウイルス感染症対策への業務支援

### 1. 兵庫県帰国者・発熱者電話相談センター

兵庫県においては、兵庫県看護協会に委託し、兵庫県帰国者・発熱者電話相談センター（以下、兵庫県電話相談）が開設され24時間の相談がなされた。それに対応する看護職の不足のため、県内の大学の看護教員らに協力が求められた。本学からも看護教員が電話相談の支援を行った。支援は、2020年3月のみであった。

### 2. 神戸市新型コロナウイルス感染症軽症者等宿泊療養施設

神戸市は、2020年4月11日に神戸市新型コロナウイルス感染症軽症者等宿泊療養施設（以下、神戸市軽症者宿泊所）を開設した（神戸市新型コロナウイルス感染症対策第1次対応検証チーム, 2020）。開設に際し神戸市保健局から本学学長へ、神戸市軽症者宿泊所の看護業務について協力依頼があった。看護職の資格を持つ本学教職員が2020年3月から2022年5月まで協力を行った。主な支援業務は、初期の段階では、日勤・夜勤従事の看護職1名枠を継続的に協力し、その内夜勤は派遣スタッフのリーダー業務を担った。

### 3. 神戸市新型コロナウイルス感染症電話相談センター

2020年2月6日から設置されていた神戸市新型コロナウイルス感染症電話相談センター（以下、神戸市電話相談）（神戸市新型コロナウイルス感染症対策第1次対応検証チーム, 2020）について、同年5月に本学の看護職の資格を持つ教職員に対して協力が求められた。本学教職員が、2020年5月から同6月まで、電話相談業務の協力を行った。主な支援内容は、直接的な電話相談業務ではなく、派遣看護師等が行う電話相談の後方支援業務であった。

### 4. 神戸市保健所保健センター

新型コロナウイルス感染症はウイルスの変異を伴いながら感染拡大が続き感染者が増大したため、保健所保健師らによる積極的疫学調査が困難な状況となった。2021年1月に神戸市から本学へ神戸市保健所保健センター（以下、神戸市保健所）業務について協力が求められた。本学においては保健師や看護師の免許を持つ教員や学生による保健所への支援を2022年5月まで行った。主な業務は、積極的疫学調査や自宅療養感染者の健康観察の実施であった。

### 5. 支援先と学内の支援業務調整

上記1) から4) の支援業務は、公衆衛生看護学分野の教授が学内外の窓口となり、神戸市健康局担当局長と調整を行った。調整は、毎月毎に学内から協力者を募り協力者リストを作成し、神戸市健康局担当局長に送付した。積極的疫学調査は、そのリストを元に、協力日の前日に協

力者へ直接に神戸市健康局担当者より連絡があり、協力先の区保健所保健センターが決定するという仕組みだった。

また支援業務すべてにおいて、学内の教職員間の情報共有は Moodle (Modular Object-Oriented Dynamic Learning Environment) という学習管理システムにて行った。すべての支援業務について、支援した教員らの職位や所属分野による業務内容の差はなかった。

すべての支援業務については、事務局と神戸市が協議し覚書が交わされ、会計年度職員契約による教員等の支援として実施された。

協力業務である神戸市看護大学の新型コロナウイルス感染症関連業務の支援期間を表 1 に示す。

### Ⅲ. 調査方法

#### 1. 調査期間

2022 年 3 月から 4 月とした。本時期に調査を実施したのは、協力依頼が少なくなり収束を迎える時期であったからである。

#### 2. 調査対象とした協力業務と対象者

本学において兵庫県および神戸市の新型コロナウイルス感染症 関連業務 (表 1) である兵庫県電話相談、神戸市電話相談、神戸市軽症者宿泊所、神戸市保健所に協力し 2022 年 3 月時点で神戸市看護大学に在籍している教員及び学生 42 人 (延べ人数: 兵庫県電話相談 10 人, 神戸市軽症者宿泊所 14 人, 神戸市電話相談 11 人, 神戸市保健所 34 人)。なお、本報告においては医療機関や

ワクチン接種業務は、学内業務であるために本対象者には含めていない。

#### 3. 調査方法

対象となる教員および学生に対しメールにて調査の趣旨や方法を記載した協力依頼文および WEB 質問紙調査 URL を送付した。調査協力が得られる場合は、WEB 質問紙調査用紙へアクセスし回答後に送信をもって調査の同意を得たものとした。本調査は無記名でおこなった。なお WEB 質問紙調査票は、オンライン調査ツールである SurveyMonkey を用いた。

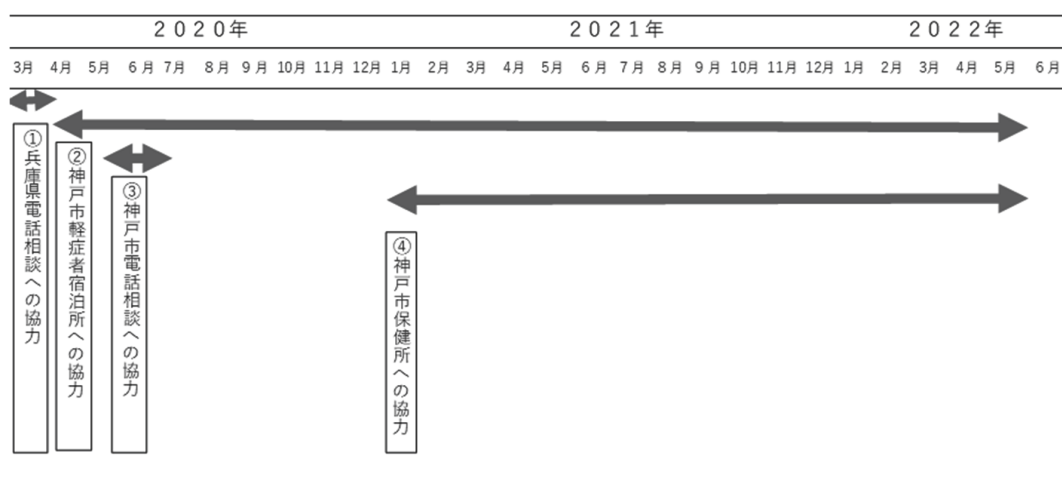
#### 4. 調査内容

調査内容は、支援業務内容 (兵庫県電話相談、神戸市電話相談、神戸市軽症者宿泊所、神戸市保健所)、支援動機、支援を通して得られたこと・良かったこと、支援に関する困難と解決策 (自由記載) 等である。支援動機、支援を通して得られたこと・良かったことは、研究者間で支援動機や支援を通して得られたり良かったと思われることを整理し調査項目の選択肢とした。支援動機や支援を通して得られたことや良かったことを選択肢の作成は、筆頭者と共同研究者 1 名が支援業務を行った当事者であり、研究者ら自身の経験や支援した教員らが得ていた内容などを整理し作成した。

#### 5. 分析方法

支援業務内容毎に、支援動機、支援を通して得られたこと・良かったことは記述統計を行った。支援に関する困難

表 1. 神戸市看護大学における新型コロナウイルス感染症に関する行政支援内容と支援期間



と解決策は、支援業務内容毎に、支援の困難とその解決策について記述内容から対応させコード名をつけ、さらに支援の困難を引き起こしている原因に着目して課題を分類した。

6. 倫理的配慮

本調査において、調査への協力は任意であること、調査は無記名であり個人の特定ができず個人情報保護に努めることを記載した依頼文を送付した。本研究は神戸市看護大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：第 2111810 号）。

表 2. 回答者の属性

n=15		
項目	人	%
職位等		
教授	5	33.3
講師・准教授	3	20.0
助教	5	33.3
大学院生・学生	2	13.3
支援した業務内容（複数回答）		
神戸市保健所保健センター業務	10	66.7
神戸市新型コロナウイルス感染症軽症者宿泊施設業務	8	53.3
神戸市新型コロナウイルス感染症電話相談業務	4	26.7
兵庫県帰国者・発熱者電話相談業務	3	20.0

表 3. 各業務への支援動機と支援を通して得られたこと・良かったこと

項目	人	%	項目	人	%
【兵庫県帰国者・発熱者電話相談】 n=3			【神戸市新型コロナウイルス感染症電話相談】 n=4		
協力した動機			協力した動機		
新型コロナウイルス感染症の現場対応について知りたかった	2	66.7	新型コロナウイルス感染症の看護業務に看護職として貢献したかった	3	75.0
新型コロナウイルス感染症の看護業務に看護職として貢献したかった	2	66.7	本学と関係が深い神戸市の業務だった	2	50.0
新型コロナウイルス感染症の電話対応に興味があった	2	66.7	看護職不足の解消に役立ちたかった	2	50.0
看護職不足の解消に役立ちたかった	1	33.3	新型コロナウイルス感染症に対する保健所の活動や対応に興味があった	1	25.0
兵庫県の電話相談だったから協力	0	0.0	新型コロナウイルス感染症の電話対応の実際について知りたかった	1	25.0
上司もしくは同僚からの強くすすめられた	0	0.0	上司もしくは同僚からの強くすすめられた	0	0.0
みんなが協力している	0	0.0	みんなが協力している	0	0.0
臨時収入が得られる	0	0.0	臨時収入が得られる	0	0.0
支援を通して得られたこと・良かった事（複数回答）			支援を通して得られたこと・良かった事（複数回答）		
新型コロナウイルス感染症の電話相談内容について知ることができた	3	100.0	新型コロナウイルス感染症の電話相談内容について知ることができた	4	100.0
新型コロナウイルス感染症の対応に看護職として少しでも貢献できた	3	100.0	新型コロナウイルス感染症の対応に看護職として少しでも貢献できた	4	100.0
新型コロナウイルス感染症の電話相談の現状について理解できた	2	66.7	新型コロナウイルス感染症の保健師の活動や対応について知れた	2	50.0
新型コロナウイルス感染症の感染者の自宅療養の実態や生活状況について理解できた	2	66.7	新型コロナウイルス感染症の感染者の自宅療養の実態や生活状況について知れた	2	50.0
新型コロナウイルス感染症に関して学生の教育に何らかの役に立った	2	66.7	新型コロナウイルス感染症の検査や医療機関へのアクセスの実際について知れた	2	50.0
保健師らへ貢献できた	1	33.3	新型コロナウイルス感染症に関して学生の教育に役に立った	2	50.0
新型コロナウイルス感染症の病態、治療等について理解できた	0	0.0	保健師らへ少しでも貢献できた	1	25.0
その他	0	0.0	新型コロナウイルス感染症の保健所の活動や対応について知れた	1	25.0
			新型コロナウイルス感染症の医療機関等の対応について知れた	1	25.0
			新型コロナウイルス感染症の病態、治療等について知れた	0	0.0
			臨時収入が入った	0	0.0
【神戸市新型コロナウイルス感染症軽症者宿泊施設】 n=8			【神戸市保健所】 n=10		
支援動機（複数回答）			支援動機（複数回答）		
新型コロナウイルス感染症の看護業務に看護職として貢献したかった	7	87.5	新型コロナウイルス感染症に対する保健所の活動や対応に興味があった	8	80.0
本学と関係が深い神戸市の業務だった	5	62.5	新型コロナウイルス感染症に対する保健師の活動や対応に興味があった	7	70.0
看護職不足の解消に役立ちたかった	5	62.5	本学と関係が深い神戸市の業務だった	7	70.0
新型コロナウイルス感染症に対する軽症者宿泊所業務に興味あった	4	50.0	新型コロナウイルス感染症の看護業務に看護職として貢献したかった	6	60.0
臨時収入が得られる	2	25.0	看護職不足の解消に役立ちたかった	5	50.0
上司もしくは同僚からの強くすすめられた	1	12.5	臨時収入が得られる	2	20.0
みんなが協力している	1	12.5	上司もしくは同僚からの強くすすめられた	0	0.0
授業や演習が中止(減少)し時間があった	1	12.5	みんなが協力している	0	0.0
支援を通して得られたこと・良かった事（複数回答）			支援を通して得られたこと・良かった事（複数回答）		
新型コロナウイルス感染症軽症者宿泊所の実態について理解できた	7	87.5	新型コロナウイルス感染症の保健師の活動や対応について理解できた	10	100.0
新型コロナウイルス感染症の対応に看護職として少しでも貢献できた	7	87.5	新型コロナウイルス感染症の自宅療養の実態や生活状況が理解できた	10	100.0
新型コロナウイルス感染症感染状況、感染者の思いについて理解できた	6	75.0	新型コロナウイルス感染症の病態、治療等について知る機会となった	8	80.0
新型コロナウイルス感染症の医療機関等の対応について理解できた	6	75.0	新型コロナウイルス感染症の対応に看護職として少しでも貢献できた	8	80.0
新型コロナウイルス感染症の病態、治療等について知れた	6	75.0	新型コロナウイルス感染症の保健所の活動や対応について理解できた	7	70.0
新型コロナウイルス感染症に関して学生の教育に何らかの役に立った	5	62.5	保健所保健センターの保健師ら（業務に）少しでも貢献できた	7	70.0
臨時収入が入った	5	62.5	新型コロナウイルス感染症に関して学生の教育に役に立った	6	60.0
神戸市の業務に貢献できた	4	50.0	臨時収入が入った	6	60.0
その他	1	12.5	早期にワクチン接種ができた	6	60.0
			新型コロナウイルス感染症の医療機関等の対応について理解できた	5	50.0

Ⅳ. 結果

1. 回答者の概要

回答者の概要を表 2 に示す。調査の結果、15 名 (35.7%) より回答があった。支援業務毎の回収数（回収率）は、兵庫県電話相談 3 名 (30.0%)、神戸市軽症者宿泊所 8 名 (57.1%)、神戸市電話相談 4 名 (36.3%)、神戸市保健所 10 名 (29.4%) であった。

回答者の職位は、教授 5 名 (33.3%)、准教授・講師 3 名 (20.0%)、助教 5 名 (33.3%)、大学院生・学生 2 名 (13.3%) であった。回答者の支援した業務内容は、神戸市保健所 10 名 (66.7%)、神戸市軽症者宿泊所 8 名 (53.3%)、神戸市電話相談 3 名 (20.0%)、兵庫県電話相談 3 名 (20.0%) であった。

2. 各支援に関する支援動機と支援を通して得られたこと・良かったこと

表 3 に各支援に関する支援動機と支援によって得られたこと・良かったことを示す。

1) 兵庫県電話相談支援について

支援動機は、「感染症の現場対応について知りたかった」



「看護業務に看護職として貢献したかった」「感染症の電話対応に興味があった」各2名(66.7%)などであった。

支援によって得られたことは、「電話相談内容について知ることができた」「看護職として少しでも貢献できた」各

3名(100.0%)、「電話相談の現状について理解できた」「感染者の自宅療養の実態や生活状況について理解できた」「学生の教育に何らかの役に立った」各2名(66.7%)などであった。

表 4. 支援に関する困難と解決策

業務内容	課題の分類	困難	解決策	記述の要約
兵庫県帰国者・発熱者電話相談	大学と現場との調整の課題	鳴り止まない電話対応に休憩・食事の時間が確保困難	オリエンテーションの必要性	突然業務が始まり、電話は途切れず、休息のタイミングがわからず昼食も夕食も食べられなかった。 休息時間の取り方に関するオリエンテーションがあるとよい
	感染症の特徴による課題	対応に限界がある中での電話対応の困難		流行初期で、PCR検査を発熱後4日まで待つよう説明が難しかった。
神戸市新型コロナウイルス感染症軽症者宿泊施設	大学の調整上の課題	大学教員に期待されている役割の未把握	大学教員の協力の意義・目的に関する提示	大学から宿泊療養施設に協力する時の自分に期待されている役割が把握できなかった。教員が宿泊療養施設に協力する意義や目的、実際の役割などのリーフレットがあればよい
		出務に関する給与形態の不明瞭さ		出務当初給与形態が決まっておらず、何名かの教員に聞かれたが、自身もわからず困った。
		体力的限界を超えての協力に対する周囲の未理解		体を壊しながら限界を超えて出務していたが、初期は、それほどたいへんではないだろうと周囲から理解を得られなかった。
	感染症の特徴による課題	変化する病態に合わせた対応の変化への困難	支援教員への病態の勉強会の開催	刻々と変化する病態の変化と、それに伴う現場の対応策に追いつくことに苦労。一度全員対象の勉強会の開催が役に立った。フォーマルな研修の機会があるとよい。
		感染状況の変化により変化する業務内容の遂行の不安		出務の度に業務内容が変わるので、自分でやりとおせるか不安になる。
	現場の課題	業務の方法や基準の曖昧さや当日リーダーによる判断の違いへの困惑	マニュアルの整備	ケア以外の業務に関する施設でのルールや基準が曖昧。マニュアルが十分に整っておらず、口頭での伝達では十分に情報が伝わらない。用紙等でマニュアル化されれば問題ない。
		日替わりのチーム構築のため指示命令系統が混乱	チーム構築	業務の割り振りはできていたがチームの活動が不明確。現場レベルのリーダーの指名がなく指示命令系統が混乱。日替わりで多職種で構成された即席のチームなので、チームビルディングのための取り組みが必要。
神戸市新型コロナウイルス感染症電話相談	大学と現場との調整の課題	電話がない時間のもてあまし	電話相談以外の保健所業務の支援	後方支援で、保健師が対応され自身は手持ち無沙汰な時間が多かった。 手の空いた時間にデータ整理など保健所の仕事を手伝えると良い。
神戸市保健所保健センター	大学と現場との調整の課題	翌日の出務場所の連絡が夜間にあり困惑(2件)	出務調整の改善	前日の夜遅い時間帯に翌日従事区役所の連絡があり遅くまで起きていないといけない。当日の段取り(家を出る時間等)が大幅に変わってくるので、早い時間帯に連絡して欲しい。
		感染者増大の時期での協力のためオリエンテーションがなくなりきりなりの対応	学内のMoodle*での情報交換	第4波の真っ只中の多忙の時期から入ったためオリエンテーションも説明もほぼなかった。現場にそれを求めることは無理だと思うので学内でのムードル等での情報交換・共有が役立った。
	大学の調整上の課題	徐々に本務が多忙になる中、感染症支援業務の継続が困難	本務継続が可能な計画	第1波時は実習が中止でコロナ関係支援がやりやすかったが、しだいに教育に関する準備や調整が多忙となりその負担の上に感染症業務を兼業が難しく感じた。兼業継続をするのであれば、本務の継続ができるような計画が必要。
		初めての区施設での困惑(保健所の夜間出入口の場所が分からない)	施設オリエンテーションの実施	土日の出務で夜間出入口の場所が分からずに建物を何度もグルグル回った。施設オリエンテーション資料が必要。
	感染症の特徴による課題	医学的知見がなく感染者の質問への回答に苦慮	未知の感染症のため未解明な点が多いことを市民に周知	医学的なデータがない部分、後遺症は治るのか、いつまで続くのかなどの質問への回答に困った。人類にとって初めての感染症であり未知の部分が多いことを市民に周知して広めていく必要がある。
	現場の課題	支援する区への対応の違いへの困惑(3件)	同様の区へ出務配置	区により対応が異なるので、なんでも確認が必要なのがつらかった。できる限り同じ場所に配置して欲しい。
		情報の非一元化で、職員に質問し手間をかける心苦しさ	情報管理や情報のシステム化	情報管理が一元化されておらず、聞かないといけず忙しい保健師の手を煩わせ心苦しい。医師らの麻酔記録など全登録システム等を参考に、日々の記録を追加できるシステムが必要。数カ月経っても情報管理面でお金をかけられておらず、現場の保健師の本来の専門職としての活動が妨げられ市民にもしわ寄せがあることに心が痛む。

\* e-Learningを支援する学習管理システムのプラットフォーム

## 2) 神戸市軽症者宿泊所支援について

軽症者宿泊所については、支援動機が、「看護業務に看護職として貢献したかった」7名(87.5%),「看護職不足の解消に役立ちたかった」「本学と関係が深い神戸市の業務だった」5名(62.5%),「軽症者宿泊所業務に興味あった」4名(50.0%),「臨時収入が得られる」2名(25.0%)などであった。

支援を通して得られたこと・良かったことは、「軽症者宿泊所の実態について理解できた」「看護職として少しでも貢献できた」各7名(87.5%),「感染状況、感染者の思いについて理解できた」「医療機関等の対応について理解できた」「病態、治療等について知れた」各6名(75.0%),「学生の教育に何らかの役に立った」「臨時収入が入った」各5名(62.5%),「神戸市の業務に貢献できた」4名(50.5%)であった。

## 3) 神戸市電話相談支援について

支援動機は、「看護業務に看護職として貢献したかった」3名(75.5%),「本学と関係が深い神戸市の業務だった」「看護職不足の解消に役立ちたかった」各2名(50.0%)などであった。

支援を通して得られたこと・良かったことは、「電話相談内容について知ることができた」「看護職として少しでも貢献できた」各4名(100.0%),「保健師の活動や対応について知れた」「感染者の自宅療養の実態や生活状況について知れた」「検査や医療機関へのアクセスの実際について知れた」「学生の教育に役に立った」各2名(50.0%)などであった。

## 4) 神戸市保健所支援について

神戸市保健所に関しては、支援動機が、「保健所の活動や対応への興味」8名(80.0%),「保健師の活動や対応への興味」「大学と関係が深い自治体業務だから」各7名(70.0%),「看護職として貢献したい」6名(60.0%)であった。

支援を通して得られたこと・良かったことは、「保健所の活動や対応が理解できた」10名(100%),「感染者の自宅療養の実態や生活状況の理解できた」10名(100%),「病態・治療等について知る機会となった」「看護職として少しでも貢献できた」各8名(80.0%),「保健所の活動や対応について理解できた」「保健師らの業務に少しでも貢献できた」各7名(70.0%),「学生の教育に役に立った」「臨時収入ができた」「早期にワクチン接種ができた」

各6名(60.0%)「医療機関等の対応について理解できた」5名(50.0%)などであった。

## 3. 各支援の困難とそれに対する解決策

表4に各支援の困難とそれに対する解決策を示す。結果では、課題の分類を【 】,「困難」や「それに対する解決策」のコードを< >で表現する。

支援の困難については、すべての支援業務について、支援した教員らが感じた困難の性質を分類したところ【大学と現場との調整の課題】【大学の調整上の課題】【現場の課題】【感染症の特徴による課題】の4つ課題に分類できた。

兵庫県電話相談は、【大学と現場との調整の課題】、【感染症の特徴による課題】の2つの課題に分類された。【大学と現場との調整の課題】は<鳴りやまない電話対応に休憩・食事の時間が確保困難>のコードで構成されていた。それへの解決策として<オリエンテーションの必要性>が挙げられた。【感染症の特徴による課題】は「流行初期で、PCR検査を発熱後4日まで待つよう説明することの難しさなどの<対応に限界がある中での電話対応の困難>の1つのコードであった。それへの解決策は挙げられなかった。

神戸市軽症者宿泊所に関しては、【大学の調整上の課題】【感染症の特徴による課題】【現場の課題】の3つの課題に分類された。【大学の調整上の課題】は、大学から宿泊療養施設に協力する時の自分に期待されている役割が把握できなかったなどの<大学教員に期待されている役割の未把握>や出務当初給与形態が決まっておらず困ったといった<出務に関する給料形態の不明瞭さ>、体を壊しながら限界を超えて出務していたが周囲から理解を得られなかったといった<体力的限界を超えての協力に対する周囲の未理解>のコードで構成されていた。<大学教員に期待されている役割の未把握>への解決策として<大学教員の協力の意義・目的に関する提示>が挙げられた。後者2つについては解決策の記載はなかった。【感染症の特徴による課題】は、刻々と変化する病態の変化とそれに伴う現場の対応対策に追いつくことに苦労するといった<変化する病態に合わせた対応の変化への困難>、出務の度に業務内容が変わり自分でやりとおせるか不安といった<感染状況の変化により変化する業務内容の遂行の不安>のコードで構成されていた。それへの解決策として<支援教員への病態の勉強会の開催>が挙げられた。【現場の課題】は、<業務の方法や基準の曖昧さや当日

リーダーによる判断の違いへの困惑><日替わりのチーム構築のため指示命令系統が混乱>のコードで構成されていた。それぞれの解決策として<マニュアルの整備><チーム構築>が挙げられた。

神戸市電話相談は、【大学と現場との調整の課題】の1つの課題に分類された。これは保健師が対応され自身は手持ち無沙汰な時間が多かったといった<電話がない時間のもてあまし>の1つのコードであった。それへの解決策として<電話相談以外の保健所業務の支援>が挙げられた。

神戸市保健所に関しては、【大学と現場との調整の課題】【大学の調整上の課題】【現場の課題】【感染症の特徴による課題】の4つ課題に分類できた。【大学と現場との調整の課題】は、前日の夜遅い時間帯に翌日の従事区役所の連絡があり遅くまで起きていないといけななど<翌日の出務場所の連絡が夜間にあり困惑>、第4波の真っ只中の多忙の時期から入ったためオリエンテーションも説明もほぼなかったといった<感染者増大の時期での協力のためオリエンテーションがなくなりかなりの対応>のコードで構成されていた。それぞれへの解決策として、早い時間に連絡するよう<出務調整の改善>、実際に実施して効果があった<学内の Moodle での情報交換>が挙げられた。【大学の調整上の課題】は、<徐々に本務が多忙になる中、感染症支援業務の継続が困難>、「土日の出務で夜間出口の場所が分からずに建物を何度もグルグル回った」など<初めての区施設での困惑>のコードで構成されていた。それぞれへの対応する解決策として<本務継続が可能な計画>、<施設オリエンテーションの実施>が挙げられた。【感染症の特徴による課題】は<医学的知見がなく感染者の質問への回答に苦慮>のコードで構成されていた。それへの解決策として<未知の感染症のため未解明な点が多いことを市民に周知>が挙げられた。【現場の課題】は、<支援する区の対応の違いへの困惑><情報の非一元化で、職員に質問し手間をかける心苦しさ>のコードで構成されていた。それぞれへの解決策として<同様の区への出務配置>、<情報管理や情報のシステム化>が挙げられた。

## V. 考察

考察においては、各支援業務を統合して検討する。

### 1. 本学における看護系教員の支援の動機と利点

すべての業務において支援動機は「新型コロナウイルス感染症の看護業務に看護職として貢献したい」がいずれも6割以上の高率であった。看護教員らは、平時は教育研究業務に専念しているものの、今回のような健康危機発生時には、自身も看護職として感染症対応の現場に身を置き実践に貢献したいという強い使命感、責任感を持っていると考えられる。これは、「支援を通して得られたこと・良かったこと」においても、「看護職として貢献できた」と回答している者がいずれも6割以上であり、貢献できた満足感や達成感を感じていることから分かる。

さらに、新型コロナウイルスは新興感染症であり、2020年当時は病態・治療方法が不明で、医療機関や保健所の対応などの方策はメディア等での報道はあるが、未知の感染症であった。そのような中、2020年3月に開始した兵庫県電話相談業務では、少数ではあるが「現場の対応について知りたかった」「電話対応に興味があった」という回答や、保健所支援の動機には、「保健所の活動や対応に興味があった」「保健師の活動や対応に興味があった」などもあった。教員らは新興感染症の最新の知見や対応に、新型コロナウイルス感染症業務の協力を通じて知識を得たい、現状を知りたいという動機も並行して持っていた。

松下（2022）は、支援により地域の感染者と電話での対話をし、その人たちが抱える不安や心配ごと、感染対策に対する取り組みへの不満を聞くなど、日々報道で目にする数字や耳にする言葉だけでは到底理解には及ばなかったことを経験できたことは意味深いものであったことを報告している。同様に本学の教員らも、支援を通じてリアルな現場の実態を知ったことは意義ある経験であると考えられる。

さらに本学の教員らは、新型コロナウイルス感染症業務の協力により得た知見を、学生の教育や自身の研究活動にも活かしていた（池田，2020）。このことは、他大学の報告にもみられ（松下，2022）、教員らの協力は単に社会貢献だけではなく、教育研究という本務に活かせる有意義なものである。新型コロナウイルス感染症の業務に協力することは、自治体にとって有益であるだけでなく、教員らにとっても教育研究に活かせ、双方に意義があることが考えられた。

### 2. 支援に関する課題と解決策

#### 1) 大学と自治体との支援に関する協定の必要性

神戸市軽症者宿泊所の支援の課題について、<出務に関する給料形態の不明瞭さ>や<大学教員らに期待され



ている役割の未把握>が挙げられていた。神戸市軽症者宿泊所支援は、対応に緊急を要した新型コロナウイルス感染症流行直後の2020年4月から実施された。その当初は協力に対する業務上の位置づけや報酬の有無、新型コロナウイルス感染症への感染など不測の事態発生時の対応責任の所在等が明確ではなかった。そのため教員らの行政支援と並行し、事務局と神戸市が支援者の身分を協議し支援業務に関する覚書が交わされ、最終的に神戸市の会計年度職員としての契約となった。新型コロナウイルス発生直後の緊急対応が必要な時期であり、支援業務をしながら処遇について検討し決定しなければならない大学側の事情があったと推測する。このような事態を想定し、今後は平時から行政協力等に関する処遇について検討し協定を結んでおくことなどが求められるだろう。

また、<大学教員らに期待されている役割の未把握>については、支援当初は、教員らにどのような役割を期待されているのか不明確な状況であった。神戸市が大学に対し協力を求めた理由は、「単に看護職の人員確保という意味だけでなく、市保健師と共に現場の状況を把握して現状を分析するとともに、今後を予測した対応ができる人員であり、行政機関としての判断と責任を持った業務遂行や内外部との調整ができると期待」したからである（山崎，2020）。大学はこのような支援を要請する側の意図を、教職員へ周知する機会を持つことも必要であったと考える。

健康危機発生時には、支援にあたり身分や目的などについて時間をかけて検討することは困難である。平時から大学と行政機関との関係の中で、健康危機管理体制における協定を結び、教職員は大学の役割の一つとして認識する必要があるだろう。大学業務と並行して支援業務を継続することは非常に困難であり、大学業務の平常化に伴う支援業務の縮小や中止の判断の基準を作成する必要があると考える。

## 2) 大学と現場との調整の課題

各支援業務に関して【大学と現場との調整の課題】が生じていた。これは、神戸市保健所の出務場所の連絡時間が夜間となる場合があり、大学と現場との出務連絡時間を早くするよう調整をすることの要望や、初めての場所に出務する際に夜間休日入り口の案内がないなどオリエンテーションの不足があり、その実施への要望であった。さらに神戸市電話相談の対応では、<電話がない時間のもてあまし>が抽出され、これは相談対応がない時間を有効に活

用したい要望であった。いずれも業務に関する調整を必要としていた。

本支援業務の調整は、平時から保健所との連携を行うことが多かった公衆衛生看護分野教授が担っていた。教員らから得られた課題を解決するために、教員らの困りことやニーズをタイムリーに把握し、課題の把握による現場との調整が必要であったと考える。協力者の引継ぎは、Moodleで実施していたため、そこに課題やその改善に関する記載を求めるなどの対応が可能であったと考える。このような調整役は健康危機時には非常に重要である。平時にはどの立場の者がその調整を担うか、またその調整方法についても具体的に計画しておくことも必要であると考える。

## 3) 新興感染症による特徴

新型コロナウイルス感染症は、治療方法や感染後の経過などが未知でありウイルス変異や感染拡大状況に伴い国の対応方針が変化していた。このことは【感染症の特徴による課題】に見られるように、支援を行った教員らは非常に対応の難しさを感じる要因となっていた。軽症者宿泊所を支援した教員は、新型コロナウイルス感染症に関する勉強会の開催が役に立ったと回答している。一方、軽症者宿泊所以外を支援した教員に対しては、このような勉強会の開催はなかった。各教員らは自ら支援前にインターネット等で新型コロナウイルス感染症やその対応に関連する最新情報を収集したり、支援時に支援施設で得られる情報を入手しながら支援していたと推測される。新型コロナウイルス感染症のような未知なる新興感染症は、誰もが知識を有しておらず、随時明らかになったり更新される最新の知見を獲得しながらの対応が求められる。加藤（2021）は、都道府県等が支援協力者からの効果的・効率的な支援を得るためには、支援者に対して新型コロナウイルス感染症に関する最新の科学的知見に基づいた知識や技術を習得するための研修による人材育成が重要であることを指摘している。

今回の協力においては、本学において独自にMoodleによる引継ぎや情報共有を行っていた。それに加え自治体において支援者へ最新の知見や対応方法を学習する機会を持つなどの方策があるとよいだろう。これを実現するには平時からの自治体と大学との体制づくりが必要と考える。

## 3. 健康危機時における看護系大学の協力の可能性

本学においては、新型コロナウイルス感染症パンデミックが発生した直後の2020年3月から感染症法5類となる



直前の2023年5月まで、兵庫県および神戸市における新型コロナウイルス感染症に関する業務に、非常に多くの看護教員および学生が協力した。このような行政の健康危機管理業務への大学からの積極的な支援に関する既存報告は、東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻（岩崎，2020）によるものがある。さらに仙台市において、2021年3月中旬の新型コロナウイルス感染症第4派に伴い宮城大学等の地元大学の教員ら60人が厚生労働省創設のIHEAT（Infectious disease Health Emergency Assistance Team）で活動したことが報告されている（桂，2021）。沖縄県の名桜大学では、ワクチン接種業務に看護系教員が協力したことが報告されている（松下，2022）。

本学のように多様で長期的な協力を実施している看護系大学は見られないものの、感染症パンデミックのような健康危機時には、本学や他大学の例にみられるように各自治体等の人員を補うために地域の看護系大学からの支援の可能性があるだろう。

#### 4. 本報告の限界と今後の課題

本報告は1大学における新型コロナウイルス感染症に関する支援の実態について明らかにしたものであるが、回収率が低く、支援を行った教員らの実態や意識が網羅できているとは限らない。今後は、全国の看護系大学の新型コロナウイルス感染症に関する行政や医療機関への協力の実態や協力体制について調査により明らかにすることが必要と考える。

本学のように多様な支援を長期間にわたり、多くの教員らが実施した報告はなく、今後繰り返されると推測される新興感染症パンデミックへの対応について、大学が大学教員らの協力体制を構築していくための資料となると考える。今後繰り返すことが予測されている感染症パンデミックに備えて、行政や医療機関と大学教職員に求める役割や身分や処遇を明確にした協力体制を検討することが課題であると考え。

## VI. 結論

看護教員等は、新型コロナウイルス感染症関連業務の支援に関して、看護職としての使命感を感じると共に、大学と関連が深い自治体の業務であることが協力の動機として大きいことが分かった。業務協力を通して、保健所の対

応、軽症者宿泊所対応ともに、感染者の実態、病理などをリアルな実際を経験し、理解することができている。また支援の経験が教育や研究に活かされる重要な機会となっており、教員らにとって意義ある経験であることが考えられた。

今後新たな感染症健康危機の発生に備え、自治体との協議の上で協定等の締結や支援体制の明確化、大学の役割などの検討が必要であることが示唆された。

本報告において申請すべきCOIはない。

## 謝辞

本報告に協力いただきました皆様に御礼申し上げます。

## VII. 文献

- 五十嵐久美子（2022）. 新興感染症流行下における災害保健活動の在り方：健康危機管理における保健師の役割. 保健師ジャーナル, 78(06), 446-451.
- 池田清子, 高田昌代, 船越明子（2022）. コロナ禍の教育対応（学部）（1）新型コロナウイルス感染症に対する兵庫県の看護職の取り組み～神戸市看護大学における教育・実習の取り組み～. 神戸市看護大学（2022）, 新型コロナウイルス感染症拡大期における神戸市看護大学の活動記録 2022年3月～2022年1月（pp.111～116）.
- 池田 清子, 岩本 里織, 水川 真理子, 他. 【with コロナ時代の臨地実習】コロナ禍の臨地実習ならではの学びを得た学生たちの将来に期待, 看護, 73(1), 70-73.
- 岩崎りほ, 本田千可子, 角川由香（2020）. 新型コロナウイルス感染症 保健師の活動を記録する 【現場からの報告】 東京大学大学院医学系研究科地域看護学分野 教員・大学院生による保健所へのボランティア支援. 保健師ジャーナル, 76(08), 646-648.
- 桂晶子, 坂東志乃, 佐藤泰啓（2021）. 新型コロナ対策における地元大学教員の保健所支援：新型コロナウイルス感染症対応のため地元大学教員がIHEATとして保健所支援を行った経験と意義. 地域保健, 52(6), 72-76.
- 加藤典子（2021）. 新型コロナウイルス感染症の感染拡大時における保健所等の体制強化 厚生労働省の取り組み, 保健師ジャーナル, 77（6）.

神戸市新型コロナウイルス感染症対策 第1次対応検証チーム (2020). 神戸市新型コロナウイルス感染症対策 第1次対応検証結果報告書. 検索月日 2024 年 4 月 26 日, <https://www.city.kobe.lg.jp/documents/36137/kennshoukekkahoukokusho2.pdf>.

公益社団法人日本 WHO 協会 (2020). WHO: 新規新型コロナウイルスで緊急事態宣言. 検索月日 2024 年 4 月 19 日, <https://japan-who.or.jp/news-releases/emergency-declaration-with-new-coronavirus/>.

厚生労働省健康局健康課長 (2021). 健健発 0331 第 3 号 令和 3 年 3 月 31 日 厚生労働省健康局健康課長通知: 令和 3 年度における新型コロナウイルス感染症等に係る対応人材 (IHEAT: Infectious disease Health Emergency Assistance Team) の運用について. 検索月日 2024 年 4 月 26 日, <https://www.zenhokan.or.jp/wp-content/uploads/tuutil115.pdf>.

松下聖子 (2022). 「地元創成」に向けた看護系大学の取り組み: 新型コロナウイルス・パンデミックにおける看護系大学教員の活動. 看護研究, 55(5), 483-488.

NHK. 感染症データーと医療・健康情報, 緊急事態宣言 1 回目の状況. 検索月日 2024 年 4 月 26 日, <https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/emergency/>.

坂口健人 (2022). With コロナ時代の災害対応—これからの災害保健活動を考える: IHEAT の仕組みとその活用について. 保健師ジャーナル, 78(06), 461-464.

山崎初美, 岩本里織 (2020). 神戸市と神戸市看護大学が協働した新型コロナウイルス感染症への取り組み. 保健師ジャーナル, 76(11), 926.